



第133回 家を看取るということ

私は仕事の関係で鳥取大学医学部のある米子市で暮らしている。母が亡くなって以来、鳥取市の実家は空き家となったままだ。築80年近い建物は所々傷んでいるが、まだ十分に使えるものと考えていた。しかし、敷地内の築年数の古い「離れ」や「蔵」は、すでに傷みが激しく手遅れになりつつある。

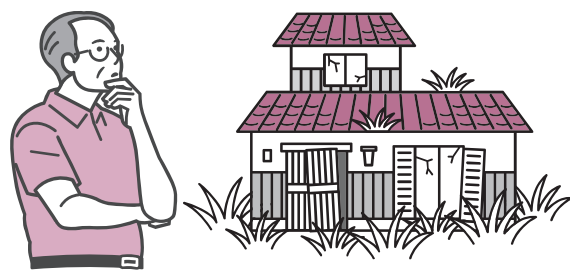
▼屋根まわりと木の剪定

まず気づいたのは、離れの屋内の惨状であった。離れは小学生の頃まで両親と弟と暮らした懐かしい建物だが長いあいだ放置されたままだった。室内に入って驚いたのは、雨漏りで二階の荷物がびしょ濡れになっており、床もきしんで弯曲していたことだ。そのときにはじめて大屋根の瓦がずれて雨漏りが続いていたことを知った。外から見ると、どうやら大雪の影響で瓦がずれ、そこから雨水が侵入していたらしい。古いタイプの瓦屋根なので、屋根底に防水シートはなく、土台の棚木と泥土で固めた上に瓦を並べた屋根である。いったん雨水が入り始めると、土が流され棚木が腐っていく。なんとか修繕しようと考えたが、大屋根は高さがあって素人の私では危なくて作業できない。結局、弟と協力してブルーシートで一部を覆うなどの応急処置しかできなかった。蔵の屋根のほうは、けやきの木の枝が落下して瓦を直撃し雨漏りしている。また、雨ドイが落ち葉でつまって水が零れ、その水跳ねのために地面近くの壁が腐ってきているようだ。結局のところ、トイの掃除をまめにやる、庭木を剪定して屋根に負担をかけない、瓦の破損に気づいたらすぐ修理するなど、日頃の細かい目くばせと手入れが必要なのだ。雨漏りや壁の傷みは放置すればどんどん連鎖して拡大していく。丁寧に手入れして早い段階で対処することができない家は傷んでいく。人の暮らしていない家はそういう注意が払われない。

子どもの頃、この家に暮らしていたときには、家屋の手入れの大切さなど何も知らなかった。どうして毎年庭木の剪定をするのか、屋根やトイの管理にこだわるのか、この年齢になってはじめて理解できた。

▼家の看取り

実家を看取るといのはなかなかつらいものだ。人間の死にざまは、家族に見送られ惜しまれつつ逝く、というのが理想かもしれない。では家の看取りとはどういうものだろうか。家はただの建物であって、そこに感情や価値観はない。しかし、そこで暮らした歴史や思い出が自分の心の中に残っている。古くなり傷んだ建物を前にして、その思い出がこちらに問いかけてくる。「このまま逝かせてほしい」とか「こんな末路は悲しすぎる」とか。そういう煩悶を抱えつつ屋根の雨漏りの修理をしていると、何だか無性に情けなく哀しい気持ちになってくる。長いあいだ家族を見守ってくれた家が、手入れが悪いために傷み朽ちていく姿を見るのは本当につらい。もちろん屋根瓦の吹き替えをすれば長持ちするのだが、今後暮らす予定のない建物に大金をかけるわけにはいかない。老いて死ぬ身なれば、せめて安らかに逝かせてあげたいと思うのである。



鳥取大学医学部
地域医療学講座
教授

谷口 晋一
(たにくち しんいち)